

1. はしがき 本年（2022年）10月11日にサクレ・クール寺院がノートルダム大聖堂やルーブル博物館と同じ重要な歴史的モニュメントとして正式に登録された記事を10月15日付のNew York Timeで知り、訪問回数が35回で一番多く訪問したのに、なんで今頃？と疑問をもち、周辺の歴史的な事を含めて調べたので報告する。上空からパリに近づくと、セーヌ川の左岸のエッフェル塔と右岸のサクレ・クール寺院(図1)が迎えてくれる。

図1及び2の出典；Above Paris ,Copyright 1984 by Robert W. Cameron and Company

図1



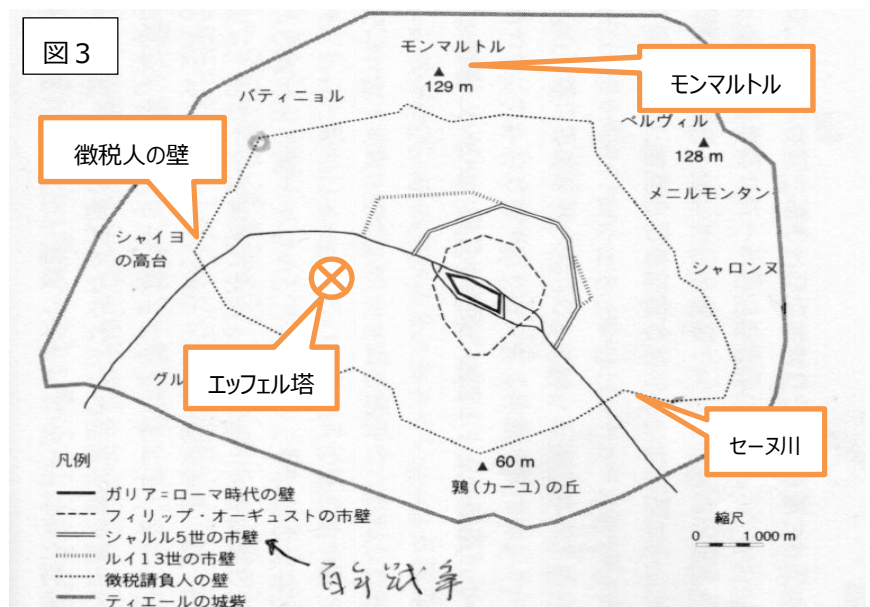
図2



図2は、寺院の北西の上空から見下ろした新しい“芸術の聖地”と呼ばれる地域である。

2. パリの中のモンマルトルの位置

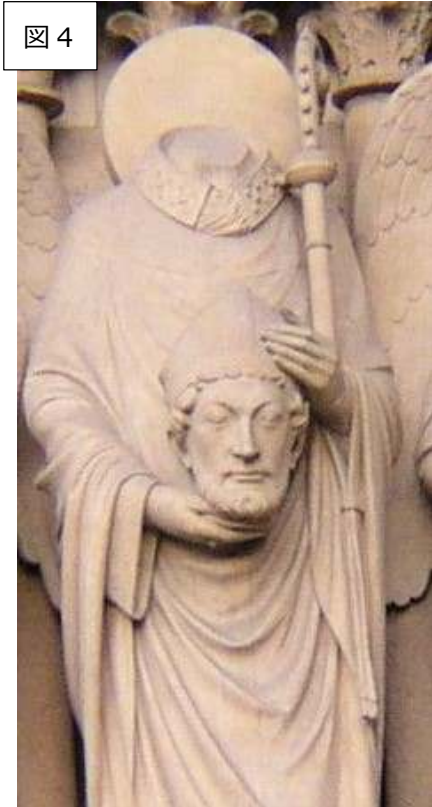
- ① 図3は、21年に9回シリーズで投稿した、フランスの城郭シリーズで引用したもので、パリに6回建設された城壁及び市壁地図である。
- ② 近代のパリの範囲は5番目の徴税人の壁であり、モンマルトルはパリ市外だったが、1860年のパリ大改造で市が最後のティエールの城壁まで拡張されたので、モンマルトルは新しい市街地として発展した。



出典：パリの歴史 白水社文庫クセジュ

③ モンマルトルにはローマ帝国が現・フランスであるガリアに進出した頃は原住民であるガリア人が住んでいた。彼らは**ドルイド教**を信仰していたが、ローマ人はイタリアから司教**ディオニシウス**を招いてキリスト教を布教させた。これにガリア人は反発し、3世紀頃ドルイドの聖地であったメルクリウス（現モンマルトル）の丘で処刑した。その丘はモン・マルテュルム＝**殉教者の丘**と呼ばれるようになった。首をはねられた**ディオニシウス**は、自らの首を抱えながら北の方に数キロメートル歩き息絶えたという。その場所が現サン・ドニの大聖堂になったとされる。以来、ラテン語のディオニシウスはフランス語で Denis だが、死後聖人となり、**Saint Denis サン・ドニ**と呼ばれている。

④ **図 4** は、首を抱えて歩いたサン・ドニの彫像でパリのノートルダム大聖堂(**図 5**)西側の三つの出入り口の左端のタンパンにある。出典：図 4、図 5とも筆者撮影（2019年のノートルダム大聖堂の火災以前の2007年の撮影）



3. サン・ドニ Saint Denis

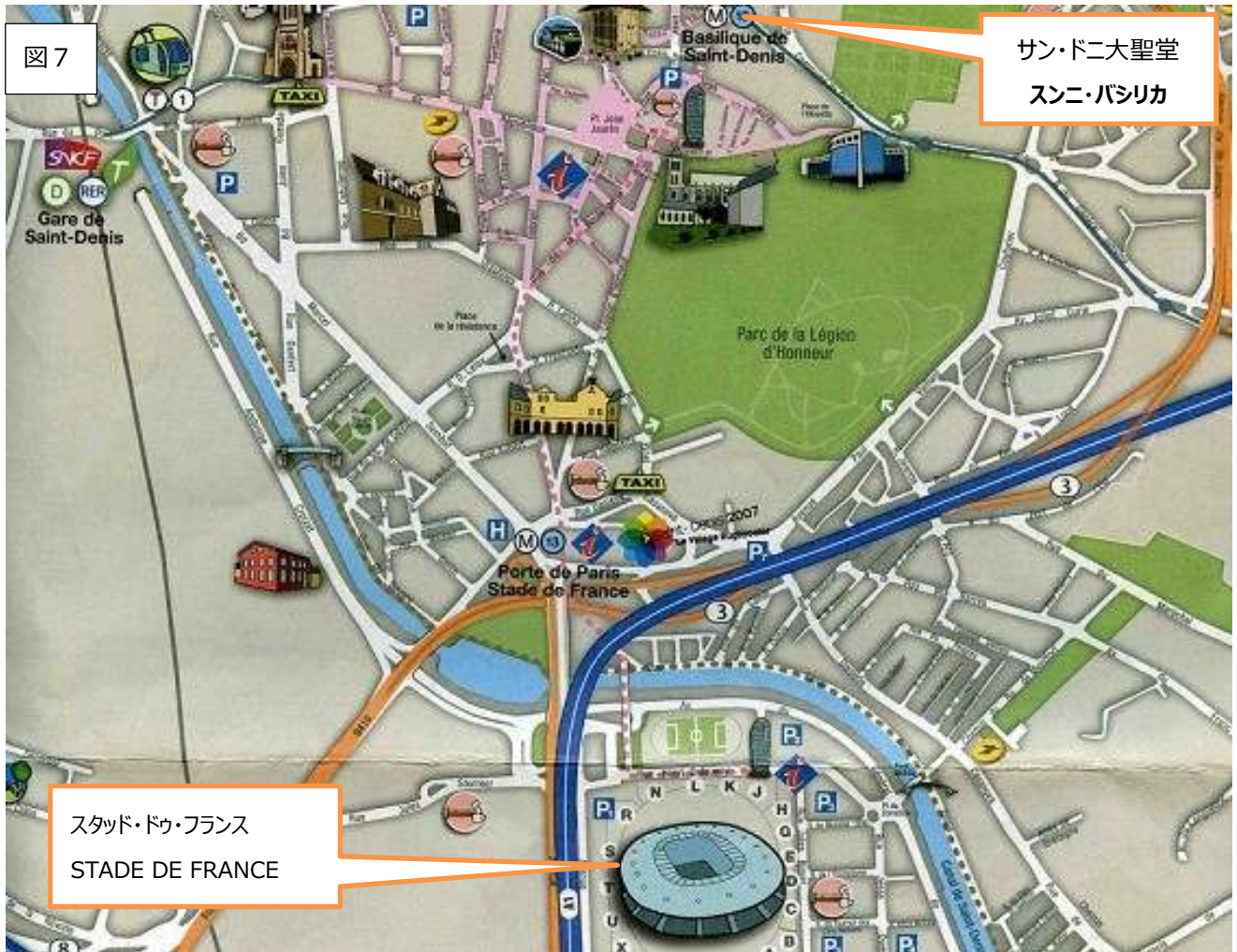
モンマルトルから北へ数キロのサン・ドニ市の中心部である。

① **サン・ドニ市街中心部：**

図 6 は、大聖堂前広場の市場（マルシェ）、野菜やチーズが多い。肉屋では兎は生きたままで売るので新鮮、大きな羊や子豚は裸で**尾頭付き**・・・お客の要求で切ったり殺したり・・・日本人には馴染めない。



- ② **サン・ドニ広域地図** (図7) 国鉄 SNCF と高速地下鉄 PER が停まる。サン・ドニカ大聖堂は後述する。スタッド・ドゥ・フランス (国立スタジアム) は来年 23 年のラグビー・ワールドカップと 24 年のパリ・オリンピックの主会場である。(但し、開会式はセーヌ川で行われる・・・各国選手団はそれぞれ船で行進したら面白いですね～?)



- ③ 図8は、パリ中央部からモンマルトルのサクレ・クール寺院を空撮、背後に国立スタジアムの大屋根が写っている。



4. サン・ドニ・バシリカ (大聖堂)

- ① サン・ドニの地は、古代ガロ・ローマ時代の埋葬地で、5世紀にバシリカ聖堂が建設され、6世紀以降は多くの王と王妃が埋葬されフランス王室の墓所とされた。12世紀には、北フランスから始まったゴシック建築を取り入れて、後にサン・ドニ修道院長が初期ゴシック芸術と建築の傑作へと変えた。ゴシック教会建築の第1号とされている。

- ② **十字軍**に参加して中東から沢山の**イエス・キリストの聖遺物**を持ち帰り、後にフランス王でただ一人**聖人**となった**ルイ 9 世**は、自らのカペー朝を、メロヴィング朝及びカロリング朝を継承するものとして示すために、両王朝の 16 人の王の棺の代わりに横臥像を作らせて、フランス王家の菩提寺としている。その他のフランス王と王妃の棺は地下の墓所の 71 か所に安置されている。最後の 71 番目がフランス革命でギロチンにかけられた**ルイ 16 世と王妃マリー・アントワネット**（図 11・図 12）で、ワーテルローの戦いで敗れたナポレオンの後で王政復古した**ルイ 18 世**が二人の遺体を集めてここに埋葬して墓碑が作られていたので撮影した。
- ③ 筆者は、地下の墓所で**ルイ 9 世**（＝聖王セント・ルイス）の墓を探す目的で 07 年に訪問したが、ミサが行われていて地下に入れなかった為、翌 08 年に再訪問したが見つからず、事務所に質問したら、「彼は第 7 回に続いて、筆者が 10 年ほど非常勤で経営に関わった南仏モンペリエのアルストム社との合併会社 **EVI** の近くの**エギユ・モルト要塞**から第 8 回十字軍に向かう途中で北アフリカの**チュニス**で病死した。遺体は、イスラムの地に埋葬できず、**モス・テウトニクス**（ラテン語:**Mos Teutonicus**、遺体をバラバラにし、ワインや水でボイルして肉や内臓を外して骨だけにする）という手法で骨をフランスに持ち帰ったが、サン・ドニには無くてシテ島の**サント・シャペル**（図 14）の宝蔵庫に保管されているとの事。しかし、頭蓋骨のみで現在も一般公開はされていないし、他の骨がどこにあるか不明である。

図 9、大聖堂前の筆者



図 10、大聖堂の有名な受胎告知のステンドグラス

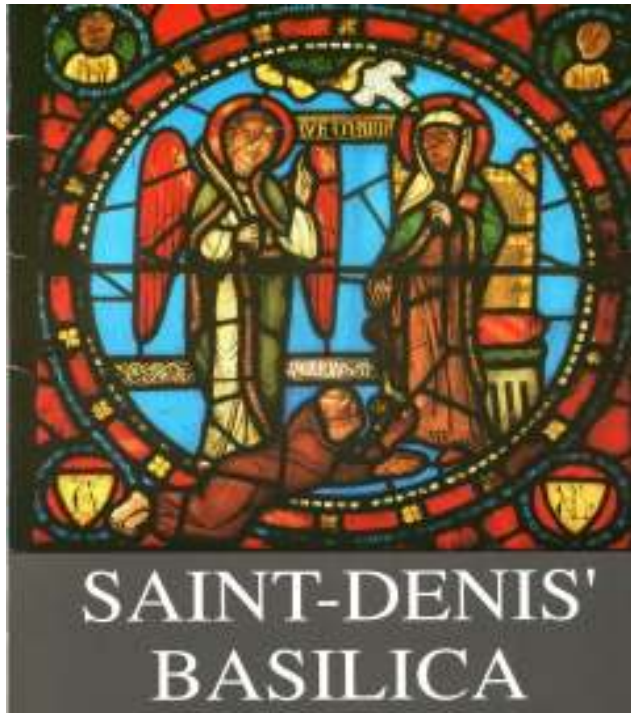


図 11



図 12



④ 入手した墓所の資料をよく見ると、「Hearts」と書いた小部屋がある。

「**心臓を遺体から切り取って専用の小壺に入れている**」と気が付いて、2013年にウィーンのカプツィナー教会の地下のハプスブルグ家の墓所を訪ねた時の写真を紹介する。

30年ほど前にウィーン工科大学を訪ねた時、リーダー教授と夕食前に散策していて、「この教会にはハプスブルク家の歴代皇帝夫妻の遺体が埋葬されており、近くの教会には彼らの心臓が埋葬されている。」と教えられ、いつか調べようと思っていたら、13年に一人旅のチャンスがあって二つの墓所の写真を撮った事だった。見学者はドイツ人と筆者の二人だけで、余り良い気持ちはしなかったが、マリー・アントアネットの母、マリア・テレジアの大きな石棺を参考として掲載する。

図 13 マリー・アントアネットの母、マリア・テレジアの石棺 @ カプツィナー教会、ウィーン、出典：筆者撮影 2013年9月

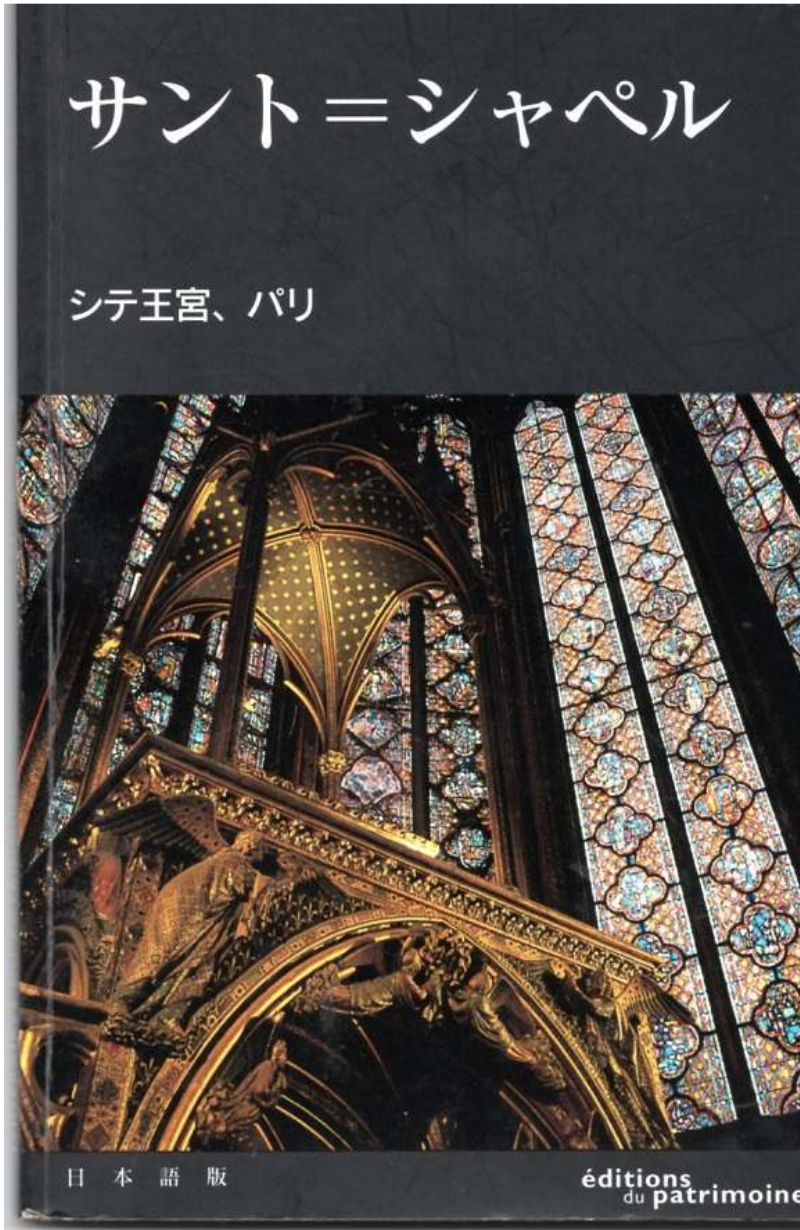


⑤ <余談> **死体の処理** ～体液の漏洩と腐敗臭を防ぐ～

ヨーロッパではローマ・カトリック起源と言われている**鉛の袋などでシールする方法**が採用されている。埋葬前の宗教儀式が長くて、教会の中に死臭が漂い、死体を鉛で包んで棺に入れるようになったようだ。先日の**エリザベス女王**の葬儀でも崩御の翌日には内側に鉛板を張り付けた木製の棺に移されたという記事を読んだ。**ダイアナ妃**の葬儀の記録には棺の重さが250kgになったそうで、屈強な男が8人で担ぎ、台車も大砲を運ぶ砲車を使用する理由も理解できる。下図は、サンドニ大聖堂の地下の墓所を見て回っていた時に石棺の中に何かを流し込んでいる説明図を見つけたが、これが鉛で封じる処理ではないか？と思って写真を撮った。撮影禁止場所なのでフラッシュを使わず、フランス語の説明文も読めなかった。



- ④ 図 14 サント・シャペルガイドブック表紙と沢山の**聖遺物**を入手したルイ 9 世聖王 ・1270 年、ルイ 9 世の死
・1297 年、ルイ 9 世の聖列加入、 ・1306 年、ルイ 9 世の**頭を納めた金の聖遺物箱**が財宝室に到着



5. サクレ・クール寺院 (Basilique du Sacré-Cœur de Montmartre)

① サクレクール寺院の概要

1977 年に初めて訪問した時、1870-71 年の普仏戦争とその直後の 71 年 3-5 月のパリ・コミュンによって命を落としたフランス市民を讃える公共建造物と説明を受けて納得し、その後モンマルトルへ行っても、シャンソニエの**ラパン・アジル**や**キャバレー・ムーラン・ルージュ**等で楽しみ、サクレ・クール寺院へは家族を案内しただけである。建設当時のフランスの教会建築は**ゴシック**が主流だったが、**ロマネスク様式・ビザンツ様式のバシリカ大聖堂**であり、更に他の教会と明らかに異なるのは外壁の色である。熱水泉で形成される「**トラバーチン travertine**」という雨に濡れ風化すると白くなる石が使用されている。白は神格化された穢れない教会を表す色であり、平和を象徴する色である。実際に着工したのは 1877 年で、40 年の歳月をかけ 1914 年に完成したものの、礼拝のために開放されたのは第一次世界大戦後の 1919 年だった為に、この寺院は皮肉にも普仏戦争以来のドイツに対する復讐の象徴として多くのフランス人から捉えられた。

図 15 サクレ・クール寺院



② 普仏戦争（＝プロイセン・フランス戦争）

1870年7月から71年5月まで続いた**ビスマルク宰相**のプロイセンと皇帝**ナポレオン三世**のフランスの戦争であり、**普仏戦争**と言われたが実態は**独仏戦争**である。1870年9月には、プロイセンは南ドイツのバイエルン等の諸王国と同盟を結びフランスに圧勝し、皇帝ナポレオン3世のフランス第二帝政は崩壊した。混乱するフランスはパリ市庁舎に国防政府を設けて共和政宣言をするが、9月17日にパリは30万のプロイセン軍に包囲された。ベルサイユ宮殿の王党派のフランス正規軍の支援も無く200万のパリ住民は孤立し、1月からは包囲と砲撃に加え物資制限を受け、市民は馬やペットなど動物を食べつくし、飢餓と寒さで約**8万人の死傷者**をだし、71年1月28日の王党派とビスマルクの休戦条約を迎えた。2月8日の国民選挙で王党派が勝利したが、パリ選出議員は共和国に好意的な首都を代表し続けた。3月1日プロイセン軍がパリ入城。（切れ目なく、次項のパリ・コミュンに続く）

③ **パリ・コミュン** →コミュン支持者は**コミューナル Communards** と言われ、当時は**共産主義者**的に見られた71年3月18日パリの武装解除にパリ民衆が蜂起、国防政府がベルサイユに避難、パリ・コミュン成立宣言、**ベルサイユ正規軍はモンマルトルの丘でプロイセン軍に挑むがパリ政権奪取に失敗し、叛乱が始まった。**

3月26日の投票でコミュン総評議会が権力を行使する。赤旗の採用、市民軍の創設、初等教育の非宗教化・無料化・義務化、教会と国家分離などである。5月21日にベルサイユ政府軍がパリに侵入し、蜂起を撃滅する。弾圧は情け容赦もなく、「**血の1週間 Bloody Week**」と呼ばれた。最後の戦闘は27日に**パール・ラシェーズ墓地**境界で展開し、生き残った**147名**の民衆は墓地を囲む塀に沿って並べて28日夜明けに処刑され、塀の下の共同埋葬穴に放り込まれてコミュンは壊滅した。この一週間で**3万人の死者**を出した。

（図16及び20はパール・ラシェーズ墓地を示す）

5. 2022年10月15日付 New York Times の記事の要点：

① 1914年の完成から1世紀以上の間、これだけのモニュメントなら財政支援や保護政策がとられる筈だが、何も支援

がなく、先週になってやっと、**パリ市議会はルーブル博物館やノートルダム大聖堂と同レベルの最高位の支援・保護を与える事を決めた。**一見、容易な決議と思われるが、実際はそうでは無かった。サクレ・クール寺院の格付けに長期間かかった理由の一部はその**歴史**が関係している。まず、この建築は1871年のパリ・コミュン革命で流血闘争が起きた場所に19世紀末に保守政治勢力の命令で建設された事である。パリ・コミュンは1871年の3月にパリで始まり5月には軍によって鎮圧された短命な革命活動であったが、鎮圧された悲劇の場所に建設された卵型ドームとロマネスク・ビザンツ様

式の建築のバシリカは、**コミュン鎮圧のシンボルと見做されてきた。**

② 先週のパリ市議会の投票前でも議員の一人が、サクレ・クール寺院は我が共和国を血で染めた事件のシンボルであり、栄誉を受ける事は出来ないと発言し、一方で、そのような発言は時代錯誤だ、サクレ・クール寺院は既にパリ観光の目玉になっている、との反論もあった。年間 1,100 万人の観光客数はノートルダム寺院に次いで 2 番目である。また標高 130 メートルというパリで一番高いモンマルトルの頂上に建っており、その前庭からは首都パリの素晴らしいパノラマを見渡せるし、更に、使用されたいる石材の種類のお陰で、雨によって白さに輝きがあり、パリ全体に光を放っている。10 月 14 日の投票日にはマクロン大統領の政府からのご支援を得られるであろう。サクレ・クール寺院はパリ市の財産ではあるが、国の歴史的モニュメントとして補助金を得て国の監査を得る必要がある。

③ パリ大学の歴史家は、サクレ・クール寺院の建設は 1871 年の普仏戦争の敗戦で消沈した国民を勇気づける為に

フランスのウルトラ・カトリック組織が始めたプロジェクトだったが、すぐに保守議員が中心だった国会の支持が得られ、パリで最初の司教になり、処刑されたサン・ドニゆかりの地が選ばれた、と説明している。彼は更に、ここに建設すればコミュンの戦士達が丘の上に据えられたプロシア軍の大砲を捕獲して 72 日間抵抗したが、フランス正規軍に虐殺された記憶を消し去ることも出来ると言う。また更に、1789 年のフランス革命の後に王政に復帰したり、また共和政にし、また帝政にしたりした数々の過ちの罪滅ぼしにもなる。その後も議論は続けられたが、2013 年の市議会では共産党議員から、いっその事、サクレ・クール寺院を破壊したらどうか、との提案もあった。

④ 2020 年には、歴史的モニュメントとする事に決まったが、共産党と極左グループが文句を言いながらも、2021 年には 1871 年のパリ・コミュンから 150 年になる事がマスコミでも取り上げられる事になり、「右翼のカトリックグループと左翼グループの和解のモニュメントの位置づけにしよう」と合意に至り、ランクもパリのノートルダム大聖堂と同格となった。

<補足> 筆者は、このような議論は最も苦手なので、ウキペディアの説明を引用する。:

パリ・コミュンは、パリ市の自治市会（**革命自治体**）のことであるが、ここでは国防政府のプロイセンとの和平交渉に反対して同時期にフランス各地で蜂起したコミュンのうち、普仏戦争後の 1871 年 3 月 26 日に**史上初の「プロレタリアート独裁」による自治政府を宣言した** 1871 年のパリのコミュンについて説明する。このパリ・コミュンは約 2 か月の間存在していた世界初の労働者自治政府であり、ヴェルサイユ政府軍によって鎮圧されたが、後の社会主義、共産主義の運動に大きな影響を及ぼし、短期間のうちに実行に移された数々の**社会民主主義政策**は、今日の世界に影響を与えた。

6. 参考図

① 図 16 パリ市内北東部



② 図 17 モンマルトル中心部

③ モンマルトルの芸術家の活躍場所

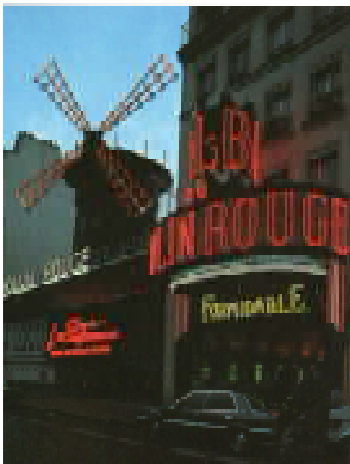


図 18 キャバレー“ムーランルーージュ”

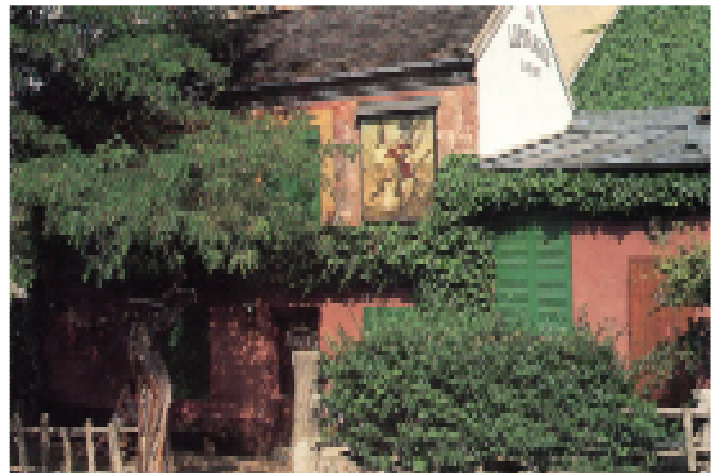


図 19 シャンソニエ ラパン・アジール 筆者の行きつけ

「赤い風車」が目立つ外観のムーラン・ルーージュは、世界的に有名なキャバレー。鍛え抜かれたダンサーたちが繰り広げる華麗なショー。パリの夜を彩るナイトスポットへ

④ 図 20 パール・ラシェーズ墓地



以上